

氏名（本籍）	タカ 高	ハシ 橋	マサ 雅	ミ 美	（埼玉県）
学位の種類	博士（美術）				
学位記番号	博美第94号				
学位授与年月日	平成13年3月28日				
学位論文等題目	作品・演目 『普賢十羅刹女図芸大本』についての現状推定模写 論文 『普賢十羅刹女図芸大本』についての欠損部の図様再現研究				
論文等審査委員					
（主査）	東京芸術大学	教授	（美術学部）	宮廻	正明
（論文第1副査）	”	”	（ ” ）	柳澤	孝
（作品第1副査）	”	”	（ ” ）	田淵	俊夫
（副査）	”	”	（ ” ）	北田	正弘
（ ” ）	”	”	（ ” ）	増田	勝彦

（論文内容の要旨）

「『普賢十羅刹女図芸大本』についての欠損部の図様再現研究」

本研究の対象作品「普賢十羅刹女図」（東京芸大大学美術館蔵・鎌倉時代）は、六牙の白象に乗って合掌する普賢菩薩と十羅刹女・二童子・二天を配し、それらが一団となって、東方から雲に乗って現われた場面を描いたものである。画面の両端には金蓮華の描き表具を下辺には法華経講讃の場面が描かれている点では、あまり例を見ない珍しい図様である。しかしながら本作品は中心となる本尊の損傷が著しく、また不適切な補絹や補彩によって本来の図様を識別することが非常に困難であり、鑑賞上に相当の影響を及ぼしているため、これまでに論文等で大きく取り上げられたことがほとんどなく、鎌倉時代の和装の例とだけ記されているに留まる。しかし、本尊の著しい欠損がなければ、同時代に制作された遺品の中でもかなりの優品であると考えられ、普賢十羅刹女図を研究する上でも新たに多大なる影響を与えるものと思われる。

修士課程において芸大本の現状模写を行った際、臨写する機会に恵まれ、実際に描きながら原本と比較することができ、原本を鑑賞するだけでは得ることのできない発見が得られた。また、経年変化に伴う劣化や損傷における保存のあり方についても深く考えさせられるものがあった。そこで再度、本来の図様の歴史的価値を何らかの形で後世に伝えることができないものかという考えに至った。

そこで本研究において、図様再現研究を視覚化し、現状模写の際の研究において不可能であったことを実現させることにより、本作品が正当な評価が得られるようになることを考えた。経年変化による影響・学術な要素・制作当初の時代性をも織り込んだ様々な角度から検証を試み、欠損部

分の図様推定図を作成し、それを補った現状に即した色彩で模写を行うことにした。

普賢十羅刹女図の基本となる表現形式を把握するために、現存する他の遺品の中でも、同時代に制作された優れた類似作品； 日野原家所蔵 日野原家本(和装本)、 藤田美術館所蔵 藤田本(唐装本)、 奈良国立博物館所蔵 奈良博本(和装本)の三作品を中心に比較検討を実施し、美術史的根拠に基づいて図様再現研究を行った。

また原本を繰り返し熟覧し、徹底的に原本調査を行うことと併せて、赤外線写真やX線写真などの光学的調査により、仕上げの描き起こしの墨線・朱線を確認することができ、微妙に残っているオリジナル部分の図様を限りなく正確に読み取ることが可能になった。仏画を構築する上で墨線がいかに大切な存在であり、また失われた図様を推定・再現する上で重要な手がかりとなることを再認識した。これらの調査を複合し図様研究を行うことは、美術史的根拠に基づいた、より客観的な図様再現ができるのではないかと考えた。

図様再現研究をもとに図様を再現し、線描における再現図を作成することにより、描線の非常に美しい優れた図様であることが確認できた。更に、現状に即した色調で彩色を施すことにより、制作当初から欠損せずに七百年の歳月を経た姿に再現するように試みた。制作された年代は、一般的に鎌倉末期といわれているが、図様・着衣の模様・線質などにより、鎌倉中期頃の作であると考えられる。また二天に関して、芸大本のみが甲冑を身につけておらず、このことは他に例がみられない。十羅刹女の着衣に施された金泥の模様も非常に豊かである。また、白象の周囲の前後関係も匠であり、全体的に見ても非常に自由な線で描かれていることからこの作品は絵仏師ではなく、絵師の手によるものとする。本研究にあたり以上のことを考慮し、鎌倉時代の優れた絵画作品として再現にあたった。

上方に欠損していた描き表具に金蓮華を二段描き加えることにより、下辺の僧俗人物の占める割合との均整がとれ、絵として非常に見やすくなった。

芸大本以外の普賢十羅刹女図の遺品の調査による美術史的知識に加え、調査から得た様々なデータに的確かつ客観的に図様を再現することができたのも画家としてのものの見方や考え方、そして創作の経験なしには不可能なことであった。また、原本調査の際に図様を正確に読み取る際の大きな力となり、オリジナル部分の現状模写と推定図を同一画面上に描き表す上でも非常に重要な要素のひとつとなった。

本研究は画家としての経験に基づく実技的要素を加味しつつ、更に具現化することができたことは、文献上や美術史のこれまでの研究では実現しえなかった全く新しい分野である。また、推定図を資料として原本とともに後世に残すことは、文化財保存の在り方のひとつとして非常に有意義なことである。

将来、本研究の成果が、復元模写や更なる美術史的考察を行う上での一助となることを願う。また、これまであまり関心を寄せられていなかった欠損の著しい現存仏画においても、図様研究の対象となるきっかけを与えることを期待する。